

〈論文〉

〈植民地期台湾における言語的特徴〉と〈現代語の変遷の萌芽的動向〉との語形的類似について

上出 大河[†]

1. はじめに

1895年から1945年に至る約半世紀の期間、台湾が日本の植民地支配下に置かれたのは周知の史実である。

植民地期台湾においては、鉱山開発、衛生環境の改善、農林水産業の近代化といったインフラストラクチャー整備と同様に、異言語を用いる本島人¹に対する国語教育（日本語教育）が急務であり、領有最初期にあたる1895年7月時点で既に伊沢修二と学務部員らによって芝山巖で本島人児童に対する国語教育（日本語教育）が開始されている。1881年に慶應義塾及び同人社が留学生を受け入れ、事実上の日本語教育を行った例等これ以前にも日本語母語教師主導の日本語教育は存在したが、台湾領有に際して行われた国語教育（日本語教育）はその規模や組織性から日本人による国家的、集団的な自国語教授の嚆矢的实践であったと位置づけてよいであろう。

当時文部省図書監修官の任にあった竹下直之が、

[†] y224206@kokugakuin.ac.jp

1 植民地期台湾において特に行政事務は、日本語母語で台湾在住の内地出身者（大和民族を中心として元来日本国の領土に居住していた人々であるが、諸事情により当時台湾に居住していた人々を中心となる）を「内地人」と呼称し、閩南語や客家語等を母語とする台湾ルーツの人々を「本島人」と呼称した。本稿においても特記なき場合にはこの意味で用いるものとする。

日本語を離れて、日本人は成立せず、逆にまた日本人を離れて日本語はない。新しい日本人の形成は、ただ日本語によつてのみ、日本人たり得るもの、と考へざるを得ぬ。わが日本語を駆使することによつて、始めて日本人としての思想が形成されるからである。この意味から、すなわち日本民族を中核と仰ぐ人間社会の理想的な構造は、当然すぎるほど当然に、日本語の進出を以て、その先駆的な要件となす²

と述べ日本語普及による「日本人としての思想」の「形成」を、「日本民族を中核と仰ぐ人間社会」を形作る「先駆的な要件」と位置づけていたこと等は植民地期台湾における教育を振り返る上で極めて重大な示唆を与えうる。むろんこれは竹下の個人的見解の表明に過ぎないが、植民地における国語教育（日本語教育）を単なる知的素養の涵養を目指す営みと捉えるのではなく皇民化に際しての最重要事項と捉える言説が濃淡の差はあるにせよ領有期間に社会的影響力を有す階層に属する人物から度々表明されたことは植民地における国語教育（日本語教育）の一種の特殊性を示しているものと思われる。

つまり、当時の国語教育（日本語教育）はいわば当時の日本の東アジア戦略³、植民地政策と密接不可分の関係を有しているということであり、この点については石（1993）やイ（1996）等の先行研究が既に多くの重大な示唆を与えているところである。これらの先行研究を含め、植民地期台湾における国語教育（日本語教育）をめぐる様々な学術領域からの知見の蓄積は、国語（日本語）普及が領有地で果たしたイデオロギッシュな側面に批判的検討を加えるという点や教材、教具の歴史の変遷を明らかにするという点で極めて多大な意義が認められる一方、その当時の領有地における言語状況をニュートラルに検討するという意味では未だ知見の蓄積が不充分であると云わざるを得ない。

そこで本稿では、このような問題意識に立脚し、当時の日本の東アジア戦略、植民地政策がもたらした植民地期台湾の言語状況の一端について、現代日本語の変遷の萌芽的動向との語形上の類似という観点から少しく分析を加えてみることにしたい。ま

2 竹下直之「言語の道義性」『日本語』第二卷十一号、1942年、6頁。

3 「アジア」とはあくまで「物語」であり、捏造されたイメージであるというエドワード・サイード『オリエンタリズム』以来の指摘を踏まえればこの表現は必ずしも妥当ではないかも知れない。本稿ではこのような指摘を踏まえた上で、あくまで便宜的に当該表現を用いるものであることに留意されたい。

た、これまでの多くの先行研究は植民地期台湾における言語状況、言語教育状況に見られるある種の特殊性に着目している例が多数を占めているが、ニュートラルな立場でその言語的性質を観察すれば、そこには言語としてのある種の普遍性が認められる可能性があるため、その点についても関心を喚起することを目指すものである。

2. 植民地期台湾における言語の特徴について

これまで、植民地期台湾における言語の特徴について日本語教育史等の領域で検討されることは僅少であった⁴。このような要因のために植民地期台湾における言語的特徴について検討する上では領有期に行われた内地人による報告にまで遡る必要が認められる。

2.1. 方言要素

内地人による言語的な報告の中で繰り返し指摘されたのは、植民地期台湾には内地方言からの影響と見られる発話が多数確認される、という点である。この点について寺川（1942）は、「日本人教師には、地方出身者が多く、夫々お国訛りを深く矯正することもなく、教授に当たる場合が普通であ」ったという点を指摘しており、ここからは植民地期台湾における方言要素の表出は教師からの影響によるものであったことが推測される。

では寺川の指摘における「お国訛り」とはどのようなものであったと思われるのか、という点については当時の国勢調査に見られるデータを参考にすることでその傾向を推し量ることが出来る。台湾総督官房臨時国勢調査部（1937）によれば、鹿児島県出身者が本島在住の内地人人口の中で最も多く、12.8パーセントを占めている。また、鹿児島を含めて熊本、福岡、佐賀、長崎、大分、宮崎の九州6県で実に44パーセントの内地人人口を占めており、このような傾向を踏まえれば、植民地期台湾の言語状況に九州方言が多大な影響を与えていた可能性は非常に高いと思われる。

また、川見（1942）は内地方言の中でも九州方言が台湾で特に重要な地位を占めていた理由を人口比に占める九州出身者の割合の高さ以外の要素から次のように述べ

4 なお、真田信治らが旧統治領における日本語を「残留日本語」という視点から言語学的に採集、分析しているような蓄積も存在する。しかし、このような研究が対象とした旧統治領で国語（日本語）を学習した人々の発話は、戦後日本語に触れる機会が乏しくなった話者の言語衰退（language attrition）の影響が否定出来ぬため、植民地期の様相を探る際には注意が必要であろう。

ている。

もう一つの大きな原因は九州人の図々しさである。台湾には比較的東北人も多いのであるが、東北地方の方言は殆んど耳にすることが出来ない。これは言葉に関する限り東北人は非常に謙遜である。自分がズーズー弁であることにひげ目を感じ、如何にもして標準語に近づきたいと努力する。しかるに九州人は一向自分の言葉に反省を加へない。自分の言葉が絶対に正しいものと信じてゐる。誤と知つても改めることをしない。中にはわざわざ九州弁を得意になつてしゃべつてゐるときへ思われる者すらある⁵。

川見は、これは「或アナウンサーに聞いた話」であつて「私一個の考でないこと」を強調している。九州地方出身者への半ば偏見じみた論理展開であり、現代の倫理的規範からは大きく逸脱した説明であるが、植民地期台湾において九州方言が広く聞かれたこと、そのような状況が国語教育にも影響を及ぼしていた可能性について当時から言及されていたこと等は現代でも注目に値する。

実際に、平松（1942）が報告した「せんせい」が「シェンセイ」、「ぜに」が「ジェニ」になるような九州方言における古音の残存的特徴と一致するような例や、『全国小学児童綴方展覧会』（1936）に採録された作文資料等に見られる「メガネヲカケル時モアリマス。カケン時モアリマス。」といった西日本全域で確認される方言系否定辞「ン」の使用の例など、用例の上でも内地方言との影響関係は明示的に指摘することが可能である。

2.2. 第二言語学習者の誤用、中間言語的性質

植民地期台湾における言語状況の複雑さは、内地延長主義に基づく統治政策上の道理としては「皇民」による言語使用であっても、本島人の存在を考慮して言語的な性質だけを見れば日本語学習者による誤用、中間言語と位置づけられる類の用例が散見されるということに起因している。

例えば、先に挙げた『全国小学児童綴方展覧会』（1936）には、学習初期にあたる本島系一年生児童の「オナカガイタタクナリ」、「『ハイ』トイツツテ」のような拍認識の問題を含む用例を採取することが可能である。このような例は、現代でも林

5 川見駒太郎（1942）「台湾に於いて使用される国語の複雑性」『日本語』二巻三号、1942年、35頁。

(2008) が「居て」→「イッテ」や「履いてる」→「ハイッテル」のような拍認識に関わる用例を多数報告しているように母語を問わず現代の日本語学習者にも同様の特徴を確認することができるため、前節で述べたような方言要素の転移とは異なる第二言語学習者の誤用、中間言語的性質の現れと捉えるのが妥当であろう。

また、『全国小学児童綴方展覧会』には本島人系五年生児童の作文中に「あなたの先生うまいだね」なる表現が確認できる。形容詞終止形にダが接続する表現は、以下に示すように内地方言にも類似の語形が存在する。

【COJADS】

- (1) ホンツルガオモシレーダ (23_e_013)
- (2) アンマリソースクネダヨネ (12_b_016)
- (3) ソーナルトアブナクテショーガネーダ (13_b_013)

このような用例を踏まえれば、『全国小学児童綴方展覧会』における形容詞終止形+ダも方言要素の転移と捉えることが可能である。しかし、類似の語形を、国立国語研究所によって整備された KOTONOHA を用いて各種コーパスの用例を横断検索したところ、調整頻度の比で約四分の三近くが I-JAS 採録の用例に偏るということが確認された⁶。この大幅な用例の偏りを踏まえれば、このような表現は、日本語学習者による誤用、中間言語的性質によって生じた可能性の方が高いようにも思われる。

3. 現代語の変遷の萌芽的動向と類似する特徴について

先述した方言要素及び誤用、中間言語的性質の現れは当時から内地人による報告の中で広く知られた言語的特徴であるが、現代的視座から改めて当時の用例に観察を加えれば、この両者に含めることの困難な用例が複数存在する。この点について報告を行うことが本稿の最大の目的である。

以下にその例を少しく紹介する。

3.1. 形容動詞型連用形の語形のゆれ

台北帝国大学教官を努めた福田良輔は、「台湾国語問題覚え書」と題した文中で、

6 検索条件は「品詞」の「大分類」が「形容詞」AND「活用形」の「大分類」が「終止形」、後方共起条件「書字形出現形」が「だ」とした。データ閲覧日は2022年9月17日。なお、以下に示すコーパスの用例やネットの用例はいずれも同日の閲覧である。

綺麗といふ漢語が国語の形容詞的な内容を有つてゐるので、「きれい／＼」「きれいきれない」といふやうに形容詞として活用させ、それが台湾の内地人の児童にまでも誤用され、ひいては方言的な地位までも占めさうな形勢である⁷。

と述べ、「きれいき／＼」「きれいきれない」といった語形が本島人並びにその発話に影響を受けた内地人に使用され、「方言的」と考えられるほどの広がりを見せていたことを指摘している。このような語形については、川見(1942:39)にも類似の「きれいく」が紹介されており、植民地期台湾において広く聞かれた語形であったことがうかがえる。

このような形容動詞型連用形の語形のゆれは、近年日本語母語話者の言語運用の中でも若年層を中心に広がりを見せており、1995年11月8日、国語審議会が文部大臣島村宜伸に対して提出した「新しい時代に応じた国語施策について」と題した審議経過報告でもこのような語形の広がりが報告されている。この報告において審議会は「慣用的な表現や語法のゆれ」として「形容動詞型の連用形の語形のゆれ(『きれいでない／きれくない』、『～みたいに／～みたく』)」を挙げ、「国語審議会は安易に認める姿勢を取るべきではないと思われる。一人一人が言葉遣いについて関心を高め、できるだけ本来の意味・用法等を辞書などで確認する習慣を持つことが必要であろう。」と述べている。

しかし、1995年の国語審議会の報告から20年以上が経過した現在、ここに形容動詞型連用形の語形のゆれとして示されたような用例は最早若年層では一般化したような感もあり、実際に校閲等を経ないで発信できるTwitter等の媒体では以下に示したような例が多数確認できる⁸。

「きれいきれない」

(1)「見た目全然きれいきれない 一口食べたが、、うん。笑」(@sorairo_Room2 2021/07/13)

7 福田良輔「台湾国語問題覚え書」、『台大文学』六卷三号、1941年、15頁。

8 Twitter以外でも、World Wide Web上で最も多く使われている検索エンジンであるGoogleの検索エンジンを用いて“”を付した完全一致検索を行ったところ、ヒットしたページ数は「きれくない」が約25,400,000件、「きれいきれない」が約7,300,000件、「綺麗くない」が31,900,000件であった。ただし、このような語形を否定的、揶揄的に引用しているページもあるため、実際の用例数と一致するわけではない。

- (2) 「いや、あなたも字きれいくない？」 (@Shinichi_TN 2021/08/29)
- (3) 「きれいくない？ 綺麗！！！！！！ 自画自賛！！！」 (@ocean_fran282 2021/09/06)
- (4) 「今日も餃子作った！やきいろきれいくない！？」 (@khtt8765 2021/10/11)
- (5) 「明石海峡大橋きれいくない？」 (@papa_kusai 2021/10/22)
- (6) 「アトピーで肌きれいくないからやだなあ」 (@9_UyU_9 2022/07/25)
- (7) 「らめっててきれいくない？？」 (@VT_maria_ria 2022/07/30)
- (8) 「無加工？色、きれいくない？」 (@kaitenjibakuoto 2022/08/03)
- (9) 「言葉遣いはそんなきれいくないし、、、」 (@puni_12poe 2022/08/30)
- (10) 「ばり肌きれいくなくてきてむちゃくちゃうれしい。」 (@74tomobon 2022/09/04)

「きれくない」

- (11) 「声もきれくないよやかましいだけ ((」 (@rian_skt_urtsm_ 2021/07/12)
- (12) 「シルエットがきれくない」 (@mmm101525 2021/09/11)
- (13) 「私の心はこんなほどきれくない、、、よ、、」 (@moa_dolce 2021/09/27)
- (14) 「ちょ！月めっちゃきれくない？」 (@neurosie_noa 2021/10/20)
- (15) 「西山さん足の形きれくない？？？」 (@moko2_fuwa2 2021/11/04)
- (16) 「えっ？きれくない？えっ？絵？？」 (@RJ_rwy2022 2022/08/11)
- (17) 「なんか今日の月きれくない？」 (@1281801ka 2022/08/11)
- (18) 「二重幅左右違うしきれくない」 (@O III _89 2022/08/13)
- (19) 「画質きれくない携帯変えたい」 (@sasa_miiii3 2022/08/31)
- (20) 「でも実際見たらあんまきれくないねん www」 (@abc_mim7 2022/09/06)

「綺麗くない」

- (21) 「立ち姿アホ綺麗くない??」 (@ISD1616 2022/07/29)
- (22) 「右の人肌綺麗くない？」 (@Activeindex 2022/07/30)
- (23) 「部屋綺麗くない」 (@tarochiti_428 2022/08/01)
- (24) 「やまだ足綺麗くないから」 (@Z1_witcher 2022/08/02)
- (25) 「味噌カツはどうやっても綺麗くない」 (@heartsroland 2022/08/07)
- (26) 「夜に見る雷の光花火みたいで綺麗くない？」 (@MeisaSasaki 2022/08/07)
- (27) 「ウィッグ綺麗くない…？」 (@nanasisama_A 2022/08/18)
- (28) 「爪の形が綺麗くないからマニキュア塗っても綺麗くない」 (@mugenn_mmm

2022/08/21)

(29)「波が高くて濁ってて綺麗くない」 (@nanaban_poketa 2022/08/28)

(30)「ちょ待って秩父星綺麗くない? ヤババ。」 (@01hum 2022/09/05)

これらは形容動詞の語幹を形容詞と混同したために生じた語形であろうと思われるが、堀尾(2007:91)は『「い形容詞」が『な形容詞』の活用を使用することが可能であるならば、『な形容詞』が『い形容詞』の活用を使用することも可能だ、と考え『新しい形容詞(用法)』を生み出していったのではないだろうか。」とこれら形容動詞型連用形の語形のゆれを「新しい形容詞(用法)」と見なす姿勢を採用している。2022年現在、国語審議会は未だ1995年報告の見解を公式に崩しておらず、堀尾のような捉え方が一般的に広がっているとは言い難いものの、1995年の国語審議会の報告から二十年以上が経過した現在、形容動詞型連用形の語形のゆれはもはや「新しい形容詞(用法)」とする見解が日本語研究者から表明されるほどにも広まっている。すなわち植民地台湾における「台湾方言」は、1995年から50年以上も早くにこれらの言語変化を先取りしていた、と位置付けることも可能であろう。

また、このような言語変化は、形容詞、形容動詞の区別の曖昧化という一種の単純化(simplification)によるものと推測することもできよう。ピジン言語(pidgin language)の特徴として、ベースとなる言語の語形変化が単純化される、といった特徴が広く指摘されており、ここにおける言語変化もこれに類似する類のものとして捉えることが可能である。言うまでもなく、植民地期台湾における言語はその定義という点で純粋なピジン言語として処理することは困難であるし、言語のどの側面をもって単純性、複雑性を科学的に計測するかという言語学上の普遍的合意が存在しないため、ピジン言語的性質の分析を植民地期台湾における言語状況に全面的に適用することにはいくらかの問題が残されている。

そもそも Robert Chaudenson 等は、理論的研究の歴史を踏まえ「単純化」といった概念そのものの曖昧さを問題視しており、ニュートラルに構造的差異を捉えるために「再構造化」と表現した方がよいのではないかと提案している⁹。しかし、ここにおける形容動詞型連用形の語形のゆれを「単純化」と捉えるにせよ、Chaudenson の言うような「再構造化」と捉えるにせよ、これまでピジン言語の特徴として指摘されてきた特徴と品詞区別の曖昧化という点で部分的に類似する要素が存在する、という

9 ロベール・ショダンソン、糟谷啓介・田中克彦訳、『クレオール語』、白水社、2000年、57頁。

ことは否定し難い側面があると言えよう。

なお、植民地期台湾における用例や日本語母語話者の現代の用例だけでなく、このような例は現代の日本語学習者にも確認可能な用例であり、その点では第二言語学習者の誤用、中間言語的性質の現れと考えることもできるが、母語話者による使用の広がりのために、その生成要因を形容詞と形容動詞の認識に関する学習上のエラーに求めるか、母語話者の使用からの影響に求めるか、という点については実定的な根拠をもって判断を下すことが困難である。

3.2. 助数詞「個」の使用範囲の拡大

旧来的、規範的には助数詞「個」が使用されない語にも、使用範囲を超えて「個」が使用されるという例も植民地期台湾の例として複数採取されている。『全国小学児童綴方展覧会』採録の尋3児童の「綴方」に「店が一つあります」という表現が確認できるほか、都留(1941:30)に「台湾の子どもは、よく『水がいつも出んなくなった。』といふ。」との記述が確認できる。また、川見(1942:39)にも「今日は風が一個もない」、「もう水筒に水が一個もない」といった例が紹介されている。

それぞれ「店」、「風」、「水」といった旧来的、規範的に「個」を選択しない語に「個」を拡大的に使用している例であるが、このような例も後に母語話者の間で広がりを見せ、先に紹介した1995年国語審議会で同様に報告されることとなる。国語審議会は報告の中において「助数詞の使い分けが行われない傾向」として指摘したうえで、「助数詞の使い方については、現代の日本語として使い分ける語を整理して示すことが必要であろう。」と述べている。これは先の形容動詞型連用形の語形のゆれの問題に対して審議会が「安易に認める姿勢を取るべきではない」と強く否定的な見解を示したことと比較すれば、穏やかな指摘に留まっているように思われ、先の場合ほど問題視はされていなかったようである。しかし、このような例はその語も広がりを見せ続け、陶(2012:30)が「現在では助数詞の使い分けが減少する傾向にある。特に若者たちは物を数えるとき、「本」「枚」などのような常用の助数詞以外の場合は何でも「つ」と「個」で済ませ、助数詞を簡略化するようになってきている。」としているように、その後の研究においても度々議論の俎上に載せられている。

このような「個」の使用範囲の拡大と見られる用例は国立国語研究所によって整備された各種コーパスでも以下に示したように該当する用例が多数見られる。

【BCCWJ】

(1) 「パスワードを探し当てながら手紙を1こづつ読んでいく話。」(OC10_00518)

- (2) 「私は十九歳で、アマの一個年上だった。」(OB6X_00247)
- (3) 「大体行く店は何個かあるけどバラバラで」(OY04_01857)
- (4) 「ヘリックス・ポマチアは一個も生きかえらなかった」(LBe4_00013)
- (5) 「いい女はいないですね。あそこは一コもないね(笑)」(PB29_00551)

ここに列挙した用例はそれぞれ旧来的、規範的には「通」、「歳」、「店」、「匹」、「人」等を選択すると思われる語であるが、すべて「個」を選択している例である。特に(2)のように年齢を「個」で示すような用法の拡張は若年層では半ば一般化した感も否めない。また、(4)、(5)のような有生性を持つ対象を示す際に「個」を選択するのは、対象に対する侮蔑的な評価や軽視を表すといった表現意図によるものとも捉えることができよう。(4)の例は愛玩動物ではなく実験動物としてヘリックス・ポマチアを捉えているため有生性を軽視していると解釈することが可能であり、(5)の例に関しても文脈から発話者のミソジニックな評価がうかがいしれるため「個」が選択されている、との解釈が成り立ちうるであろう。

「個」の使用範囲の拡大は、使用される助数詞のヴァリエーションの減少と結びついており、これもある種の単純化、再構造化の結果と考えられるかもしれない。しかし、本来数える対象を範疇化する機能を持つ助数詞のヴァリエーションが減少することとはそれだけ意味内容の類推が困難になることになるため、これを助数詞機能の単純化と捉えられるか否かという点については疑問が残る部分がある。

また、このような例は下に示した通り、現代初級日本語学習者の用例としても広く確認することができる。

【I-JAS】

- (6) 「木が一個あります」(CCT10-D)
- (7) 「私猫一個飼って」(JJE64-I)
- (8) 「一個手前の駅から」(JJJ17-1)
- (9) 「家が、一個あり、ありますけど」(KKR38-D)
- (10) 「あーいえいえ乗り換えが一個あります」(KKR58-D)

上に列挙した用例はそれぞれ旧来的、規範的には「本」、「匹」、「駅」、「軒」、「回」等が選択されると思われる語であるが、母語話者に近年見られる用例と同様に「個」が用法拡大的に用いられている。しかし、これらの例はBCCWJから採集した母語話者の用例と異なり、何らかの表現意図による選択とは考え難いものが大半であり、

適切な助数詞の習得上のつまずきのために「個」を代用的に用いている可能性が高いように思われる。

現代の日本語学習者にも類似の用例が見られるため、植民地期台湾における「個」の使用範囲の拡大もおそらくはこのような助数詞の習得上の困難のために生じたものである可能性が高いとみて良いであろう。

3.3. 新方言的な「んくなる」

助数詞「個」の使用範囲の拡大の例として紹介した都留（1941：39）の「水がいっつも出んなくなった。」という例には、もう一点注目し得る特徴が表出している。それは「出んくなる」という語形に見える「んくなる」的な Ku 形使用に関する特徴であり、これが後に井上史雄の用語における「新方言」として指摘されることになる類の語形と類似している点で興味深い。これと類似する用例は、川見（1942：38）に、「出んくなる」、「来んくなる」、「見んくなる」が紹介されており、このような「んくなる」の使用も植民地期台湾において一定の広がりが見られたものと思われる。同書で川見は用例の紹介に留まらず、「日本の西部方言では、打消の助動詞のぬの口語化はんである。それで出ぬは出んであるが、この出んと標準語の出なくとが繋ぎ合はされて出んくなるといふやうになつたものであらう。」とその生成要因を分析している。

このような例は、以下に示した通り現代の日本語母語話者にも若年層を中心に広く用例が確認される。なお、検索条件は、書字形出現形「ん」、後方共起書字形出現形「く」、後方共起語彙素読み「ナル」、とした。

【BCCWJ】

- (1) 「いま3時すぎたけど、一旦座ったら、うごけんなくなった〜」(OY14_11626)
- (2) 「関係無いけどピアノの高いソが出んくなっちゃまった＼（＾o＾）／」(OY14_53082)
- (3) 「タバスコ少し入れたら猛烈に辛くなって飲めんなくなったw」(OY04_01009)
- (4) 「それから後は腕に力が入らんくなっちゃうで…」(PB17_00021)
- (5) 「みてわけわからんくなって。」(OY14_26706)

【NWJC】

- (6) 「それで余計に決着がつかんなくなったwww」(39880713.767932.1)
- (7) 「俺のキャラがわからんくなってきた」(2429181.4128706.1)
- (8) 「気分悪くなって立ってられんくなってベッドでグッタリ…」

(55888867.3848027.1)

(9)「ロッカー入れたら場所が解らんくなって取れなくなるんじゃない」
(16785168.3202266.1)

(10)「地方で営業できんくなったら生活していけねえ～ぞ～(笑)」
(13862482.3207139.1)

コーパスを用いた調査で確認された用例はいずれも重々しい文脈では用いられておらず比較的くだけた表現として用いられていることがうかがえ、改まった場面では基本的に用いられない、という新方言の特徴と合致しているように思われる。また、このような Ku 形の成立の要因として真田(1987:26)は、標準語「ない」の連用形「なく」からの影響を想定した上で、活用体系の形容詞化の問題とする見方を示している。

植民地期台湾におけるこの語形の生成要因については管見の限り施政権喪失後の先行研究が存在しないが、おそらくは教科書等によって規範的、準標準語的な語形を学習した本島人が、九州方言、西日本方言的要素を含んだ内地人の発話の中に否定辞「ン」の使用を確認し、学習上の類推から「出んくなる」、「来んくなる」等の語形を作り出していったものであろう。新方言の生成要因としては、標準語や他方言との接触による変化が広く挙げられているが、植民地期台湾においても、教材に見られる語形と周囲の方言話者の発話が接触を起こして生成に至ったと仮定するとすれば、成立過程においてもこのような語形は新方言的あるいはネオ方言的であったということになる。

なお、日本語学習者による用例が多数採録されている多言語母語の日本語学習者横断コーパス(I-JAS)にはヒットする用例が存在しなかった。この点については、収録の偏りのために本来使用されている用例が見られなかった可能性と植民地期台湾における場合と異なり、九州方言、西日本方言が学習者に与えた影響が限定的であったために、このような語形が獲得されなかった可能性の双方を考慮する必要があるであろう。

以上、植民地期台湾における用例の中には現代における母語話者の特徴的な語形、用法の特徴と類似する用例が複数確認されることを確認してきた。

植民地期台湾における発話として採取された用例が、台湾における本島人の発話なのか内地人の発話を含むのか、あるいは双方に見られた特徴なのか、という点で曖昧な資料が多く、また、植民地期台湾における人々と現代日本語学習者、現代日本語母

語話者とでは言語的な背景が大きく異なるため、列挙した用例から安易に現代語の変遷を先取りしていたと結論づけることはできまい。しかし、植民地期台湾において見られた用例に現代語の変遷と語形の面で類似する特徴が見られることは重く受け止められるべき事実であり、植民地期台湾における言語状況に関する研究が現代日本語研究に寄与しうる側面を部分的に有していることを示唆しているものと捉えられよう。

4. おわりに

本稿では、母語話者による現代語の特徴的な使用が植民地期台湾における報告の中に複数確認されることについて具体例を挙げながら指摘した。

植民地期台湾においては、単純な方言要素の転移や第二言語学習者の誤用、中間言語的性質と捉える語形の他、「単純化」、「再構造化」によって生じたものであると推測される形容動詞型連用形の語形のゆれ及び助数詞の使用範囲の拡大や、教科書における規範的、準標準語的な語形と内地人の方言使用の接触によって生じたと思われる新方言的な語形も確認される。このような例は、植民地期台湾における言語状況を短絡的に言語学習者の誤用、中間言語や方言要素の転移の表出と捉えることの不適切さを明らかにする例とも考えられ、誤用分析的手法、方言分析的手法を援用しながらも、誤用や方言の性質の中に過度に範疇化せずニュートラルな態度で植民地期台湾における言語状況を分析する必要性を示唆するものと思われる。また、この分野を対象とした研究が現代日本語研究とも部分的につながりうることについても指摘したが、この点もある種の新規性が認められうる要素と言えるかもしれない。

先述の通り、植民地期台湾における用例が現代語の変遷を先取りしていた、と安易に結論づける姿勢に稿者は与せず、そのような結論は決して本稿の意図するところではない。そもそも本稿で現代語の萌芽的動向として取り扱った語形はあくまで近年その広がりや認知され取り上げられたという類の語形であり、必ずしも近年初めて出現したものではない。例えば「きれいくない」のような形容動詞型連用形の語形のゆれについては沖野岩三郎によって1935年に著された書籍に児童「ナオミ」の発話が既に記述されている。

ナオミは否定の言葉を語尾の「……くない」で成立すると思つてゐるので、「美しい」を「美しくない」「をかしい」を「をかしくない」で打消すごとく、「いいね」に対して「いいくない」といひ、「きれいね」に対して、「きれいくない」「かんしんね」に対して「かんしんくない」といふやうに、ナオミ一流の文法を

用ひてみます¹⁰。

1935年といえば先に紹介した通り福田良輔によって台湾における「きれいくない」が報告される僅か6年前である。つまり、このような形容動詞型連用形の語形のゆれはその語形の広がり及び一般性の獲得という点では現代語の動向として捉えられる一方、1930年代後半から1940年代初頭にかけて既に用例が確認できるということになる。現在確認できる最初期の用例が、内地と本島のほぼ同時期の用例であることを踏まえれば、このような語形は植民地期台湾における特殊性が生み出した語形ではなく、ある種の普遍性を有す言語上の変化であったと捉えるのが妥当であろう。

植民地期台湾におけるこのような用例を第二言語学習者の誤用、中間言語的性質によるものと短絡的に認識する態度は、沖野が引用部分に続けて「私はナオミが其の創見者であることを誇りたく思ひます。」と述べ、語形の特異性、新規性にばかり拘泥し、そこに言語上の普遍的性質が存在する可能性を想定していないことに類似している。真に言語学的な態度をここに適応するとすれば、各種語形の生成要因についてその特異性、新規性のみならず普遍性という観点を勘案する必要が認められる、という点についてはここで指摘しておきたい。

今後は、本稿で述べたような語形の生成要因について実証的に解明すべく調査を進めるとともに、他の領有地において類似の語形が同時代的に確認されるか否かという点について明らかにしていくことを、稿者の課題としたい。

参考文献

- イ・ヨンスク (1996) 『「国語」という思想—近代日本の言語認識』、岩波書店
 川見駒太郎 (1942) 「台湾に於いて使用される国語の複雑性」(『日本語』二卷三号)
 石剛 (1993) 『植民地支配と日本語』、三元社
 真田信治 (1987) 「ことばの変化のダイナミズム—関西圏における neo-dialect について」
 (『言語生活』429)、筑摩書房
 竹下直之 (1942) 「言語の道義性」(『日本語』第二卷十一号)
 都留長彦 (1941) 「台湾方言について」(『国語の台湾 1』pp29~31)
 寺川喜四男 (1942) 『台湾に於ける国語音韻論』、台湾学芸社
 陶 萍 (2012) 「助数詞に見る意味分野別語彙構造：「一つ」と「一個」との比較を通し

10 沖野岩三郎『育児日記から』、子供の教養社、1935年、251頁。

て」(『論究日本文学(96)』pp29~42)

林謙太郎(2008)「中国語・朝鮮語話者による日本語表記の誤り(3)一漢字の読み表記を中心に一」(『二松学舎大学人文論叢(81)』pp70~90)

平松誉資事(1942)『大東亜共通語としての日本語教授の建設』、光照會

福田良輔(1941)「台湾国語問題覚え書」(『台大文学』六卷三号)

堀尾佳以(2007)「新しい形容詞」(『比較社会文化研究』22号 pp87~99)

Robert Chaudenson、糟谷啓介ら訳(2000)『クレオール語』、白水社

資料

沖野岩三郎(1935)『育児日記から』、子供の教養社

全国小学児童綴方展覧会編(1936)『全国小学児童綴方展覧会』、全国小学児童綴方展覧会事務所

台湾総督官房臨時国勢調査部(1937)『昭和12年国勢調査結果表』

使用コーパス

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)

『日本語諸方言コーパス』(COJADS)

『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』(I-JAS)

『国語研日本語ウェブコーパス』(NWJC)